The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	南宋臨安の人口再説
Author(s)	斯波, 義信
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1974, 7, p. 63-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47976
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

南宋臨安の人口再説

斯波義信

南宋の首都臨安(杭州)の城内外の都市人口について、加藤繁氏は三十万戸、百五十万人前後(城内九十万人、南廂四十万人、北廂二十万人)と推定し、[1]一方、桑原隲蔵、[2]池田静夫、[3]日野開三郎氏[4]は百万戸、五百万人と推定している(池田説は城内百五十万人、南廂二百万人、北廂百万人)。両説は確かに甚だ隔絶しているが、しかし立論の根拠に援用された資料の中、臨安の細民人口及びその米穀消費についての夢粱録巻一六米鋪、癸辛雑識続集巻上および胡長孺の廣福廟傳(嘉靖仁和県志巻七)の記述は客観性があり、かつその解釈も両説共に一致している。つまり城内の細民は十六七万人、食米一日三千石前後という事実はほぼ動かせない。問題は、この事実を基礎に、他の雑多な概数的統計を参照して、いかにして合理的全人口推計を下すかにある。加藤氏は「臨安戸口追論」[5]で、都市の補給という問題を一歩進め、行在省倉上中下三界の倉儲、各界百五十万石、総計四百五十万石という事実に拠って、省倉に補給を仰ぐ宗室・官僚・軍人は主として城内に住み、城内九十万の人口中、細民を除く七十三四万の大多数に相当すると主張した。

筆者は加藤氏の百五十万人説は一応妥当な推計と考え、かつ補給の観点から一貫して追求する方法は客観性が高

いと思うが、行在省倉三界計四百五十万石が、宗室・官僚・軍人の年間消費であったとする意見には賛成できない。理由は、㈠当時の資料の証言では、臨安で年間に消費される官米（官俸兵食）は百十二～百七十万石であり、(6)㈡また臨安の補給を課せられた兩浙路の上供米年額は、名目百五十五万石、実徴八十五万石で、差額七十万石は毎年、臨安・平江で商人から和糴して補充し、㈠の数字に合致するからである。(7)思うに行在省倉計四百五十万石の倉儲は、三年分の蓄積額を挙げているのであって、年間の消費はその三分の一の百五十万石であったに相違ない。この推定は当時の全国の市糴つまり官米の補給制度から裏づけの論証をすることができる。(8)このように解すると、加藤説の如く、城内九十万人の中、細民を除く七十余万人の大多数を宗室・官僚・軍人と見ることは不可能で、むしろ富豪・富商・不在地主の比率を高く考えねばならない。しかし池田説の如く、城内百五十万とするには、富豪・不在地主の数を途方もなく多く評価せねばならず、彼等に扶養される家族や使用人の数が多かったとしても、一方でかなり明確な数値の知られる細民十六七万人、その食米三千石という事実に照して、到底受け入れることが出来ない。

注

(1) 加藤繁「南宋の首府臨安の戸口に就いて」（『支那経済史考證』巻下）、「臨安戸口追論」（『支那経済史考證』巻下）。
(2) 桑原隲藏「歴史上より觀たる南北支那」（『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』、『東洋文明史論叢』、『桑原隲藏全集』第二巻）。
(3) 池田静夫「南宋の首都臨安の戸口の再吟味」（文化五―一二）、『支那水利地理史研究』一一八―一二九頁。
(4) 日野開三郎『唐代邸店の研究』三四〇頁。日野氏は城内三十万戸、城下百万戸と推定している。
(5) 加藤繁前註(1)参照。
(6) 朱文公文集巻九四散文閣直學士李公（椿年）墓誌銘「京師月須米十四万五千石」、建炎以来繫年要録巻一五八紹興十八年九月丙申「行在歳支軍粮百五十万石」、同書巻一八四紹興三十年正月癸卯「行在合用米百十二万石」。
(7) 宋會要輯稿食貨四〇市糴粮草、乾道元年正月二十日、玉海巻一八六至和便糴。
(8) 斯波『宋代商業史研究』一五五、一五六頁。